
花火の恋

回覧板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花火の恋

【Nコード】

N2072V

【作者名】

回覧板

【あらすじ】

迷子の日に出会ったあの人、私はとうとうあの人に出会うのだ。

***大久保 唯さん主催、『夏色屋台』参加作品。『リンゴ飴』。

「食うか？」

太陽のような笑顔をした天岸陽向が隣の少女の目の前にリンゴ飴をちらつかせながら問いかける。

「いる。食う」

「その前に名前聞かせろよ、名前知らないきゃ迷子にもいけねえ。俺は名前教えやし」

「知らない変態陽向には教えるなつてママが言つてた」

「教えてくれなきゃ、これはあげない」

「変態陽向はよくもので釣るつてママが言つてた」

「じゃあいらないんだな？」

「いるけど、いらない」

リンゴ飴への未練を捨てきれない状態で少女はぷいとあらぬ方向に顔を向けるが、どうも目だけはリンゴ飴から離れないようだ。

試しにリンゴ飴を動かしたら、その分だけ顔が動いて面白くなりそうだが、陽向はしなかった。

「いるけどいらないつてどっちだよ」

「新しく買う！」

「金はあるのか？」

「……ないけど」

「じゃあ買えないだろ」

「買ーうーのー！」

「いや、無理だつての。たくっ……」

陽向は強引に少女にリンゴ飴を握らせた。

その時、少女の手に握らせるために陽向の手が触れ、途端に恥ずかしくなった陽向は弾かれるように飛び退いた。

その時、握った手からリンゴ飴も離れてしまう。

少女が小さくあつと声を洩らす前に、リンゴ飴は見事地面につい

てしまった。

「おいおい……」

陽向は呆れたように笑い、反対の手に持った自分の食べかけのリング飴を差し出す。

「一口食うか？」

「……うん」

今にも泣きそうな声で少女は答えた。

食べかけだったリング飴はいつものように甘かったけど、涙の分だけしょっぱかった。

▲ ▲ ▲ ▲ ▲

窓から強い日差しの差してくる気持ちのいい朝のこと。

まるで何かに弾かれたように飛び起きた御堂花火は、そのままベツドから下りて、階段を下りて、洗面所に向かった。

蛇口の下に顔を突っ込み放射。

風邪でもひいたかのように真っ赤だった顔が普通の色になっていく。

「くそっ！ 夏祭りが近くなるといつもこれだ！ なんであたしが変態陽向のことを考えなきゃいけないのよ！」

水を止め、垂れないようにタオルを被りながら苛立たしげに悪態をつく。

天岸と御堂の関わりは簡単に言えば、赤の他人だ。たまたま御堂が迷子になった時、親が見つかるまで一緒にいてくれただけ。その後、さつさと姿を消してしまった。結局名前は言わなかった、子供なりに恥ずかしかったのだ。

あれから八年、高校一年生になった今でも天岸のことが忘れられない御堂は、彼氏いない歴〃年齢になっている。理想とする男性像

がよくわからない天岸なので仕方ないといえば仕方ないのだが、本人はそのことがどうもお気に召さないようだ。

しかもこうやってお祭りの度に夢を見てしまうくらい夢中だというのにも関わらずだ。

「変態陽向……」

フルネームで呼ぶと頭が真っ白になるくらい恥ずかしいので、恥ずかしさを誤魔化すために言っていた呼び方で呼ぶ。

太陽のような笑顔をした天岸を想像。

「ひゃう！？ はっ！ いかんいかん」

真っ赤になった顔をしばしと水と一緒に叩いて顔を拭く。寝起きのとろんとした気持ち良さが大好きな御堂に取って今朝は幸運な不運だったのだった。

ともかくにもまるで逃げるように過ぎ去っていく朝の時間を取りもどすように朝食を取った御堂。口の端についたいちごジャムを舐めとりながら立ち上がり、階段を上る。

するとベッドがぶるぶると震えていた。

御堂はベッドにダイブして、布団のなかを弄る。中から出てきたのは携帯だった。

「もしもし！」

「今起きたでしょ？」

「いや、ちゃんと起きてたよ？」

「嘘でしょ？ だっていつもこの時間に起きてるじゃん」

「今日は違うの！」

ふうんと疑うような声が聞こえ、次にはため息が聞こえる。

「まあいいわよ。それでね、今日のことなんだけど、今日暇よね？」

「絢ちゃんが私をどういう風に見てるか分かった！ でも暇！」

「知ってるわよ。確認よ、か、く、に、ん。それでね？ 浴衣だと自転車乗れないでしょ？ だから私の従兄弟が会場まで送ってくれるから、私の家に来なさい」

「浴衣でいくの？」

「あんたもよ？」

「私も!？」

「当然じゃない。着付けは私がしてあげるから、浴衣、持ってきたさいよ？」

「持っていかなかったら？」

「小学生の頃の浴衣があつた気がするわね」

「持って行かせていただきます!」

「よろしい! 昼ご飯もこっちで食べる？」

「あ、よろしく!」

「了解。じゃ、待つてるからね」

電話が切られてからもしばらく耳に携帯を付けたまま固まる。それからようやく携帯を畳んでベッドに置いて深呼吸。

「浴衣……、どこだっけ？」

御堂の浴衣探しは昼まで続いたとか。

▲ ▲ ▲ ▲ ▲

「あんたが約束を守る意志をみせなければ、私はあんたのオムライスにケチャップをぶちまけるまでよ!」

と、デスクロールが響いたのがちょうど浴衣をみつけてエアギターを弾いていた時のこと。電話にも関わらず土下座で謝ったのはその二秒後。

「早く来なさい! 折角オムライス作ったのに冷めちゃうじゃない!」

「ごめんなさい!」

「まあいいわ、早く来るのよ? チンしとくから」

「はい!」

携帯を切り、浴衣を鞆に詰める。服はどうせ着替えるからジャー

ジの上下、化粧も向こうでしょう。

御堂は鞆を持ち、家を飛び出した。

親友、如月絢奈の家まではそう遠くない。自転車で爆発的な加速と華麗なコーナリングをすれば五分弱でつけるだろう、そんなテクニクを持たない御堂でも十五分くらいでつける。

行く途中、ちらほらと浴衣の人が目に付くと、祭が楽しみで楽しみで仕方ない気分になせる。

如月の家に着き、チャイムを鳴らす。

「自己新！？ やりますわね……」

「世界で、戦ってますから。って、なんでやねん！」

華麗にツツコミをいれたところで中に入る。如月はオムライスを取るためにキッチンへ。

中はとても広くて綺麗で整っている。それが当然だと主張しているような感じだ。

座ったらオムライスを持った如月が戻ってきて、御堂に作ったオムライスを御堂の前に置く。

「ん？ デーイーエーティーエッチ？ …… DEATH！ 絢ち

やんひどいよ！」

「ごめんごめん、あんまり来るのが遅かったから、つい。気にしないで、いつものことだから」

「わ、わかっ……えー！？」

二人はコントのように楽しい時間を過ごしながら夜を待った。

日も落ち始め、そろそろ祭に行く時間になってきたところで、御堂と如月は着物に着替えた。

如月は嗜みだとかなんとか言って完璧なきつけを披露。一回だけ挑戦した御堂は、着物の端を踏んで華麗な側転をしてしまったので、如月に全てをまかした。

着物が着れたところで、後は如月の従兄弟を待つのみとなったのだが、なかなか来ない。

如月がすぐに電話すると、どうやら友達を乗せるから遅くなると

のこと。

「まあ仕方ないよ」

「そうだね、大学生だし、付き合いがあるよね」
ぷくつと頬を膨らませる。拗ねているようだ。

にやにやと如月のことを見ていたら、死んだ魚でも見るような目で見返してきた。その顔が、とつても怖い、と御堂は震え上がった。
「ぐう！ ス。ウターが壊れんばかりの眼力だ！」

冗談で遊んでいると、ようやく車が到着した。

「お待たせ」

その車から降りてきたのは、どこか如月のような雰囲気を持った男だった。仏頂面がまた似合っている。

「さて乗った乗った、すぐ出発だ！」

「はい」

明るく返事をして後ろに乗る。大きな車なので、どこかゆったりとした気持ちになれる。

祭に向けて車が発車した。

▲ ▲ ▲ ▲ ▲

会場は少し離れた神社の境内で行われる。この辺りではそれなりに有名な祭なので、必然的に境内は込み合っている。

如月の従兄弟とその友達は車を止めてからくるといふことで、御堂と如月は先に祭を楽しむことに。

「いやー、毎回来てるけど、やっぱり混むね」

「人がゴミのようでしょ？」

「まったくだよ」

一番手っ取り早く前に進むために人の流れに従って歩く。

「あ、リンゴ飴買っていい？」

「あんたはいつも買うわね？ そんなに好きなの？」

「いや、べたつくからあんまり好きじゃない」

「何で買って——何かあるわね？」

獲物を見つけたようにきらりと光る目が御堂を捕らえた。

やられた、と御堂は思う。逃がしてくれるような優しい友達なら親友にはならなかっただろう。それくらいには如月のことを信用している。

「絶対、言わないでよね？」

だから八年前の出来事を纏めて話す。話し終えて恥ずかしさの余り顔を覆う御堂を尻目に、如月は金縛りにでもあったかのように動けない。天岸陽向。その名前に覚えがあるからだ。

「花ちゃん、よく聞いてくれるかしら？」

「ど、どうしたの？」

「実はね——」

「——え？」

祭にきた人々の声で聞き取りづらかった如月の声をはっきりと拾った御堂だが、理解するのが追いつかずしばらく呆然として、それからあうあうあたふたとすることになった。

▲ ▲ ▲ ▲ ▲

いつかの日、迷子の少女と優しい好青年が話していた場所、そこに一人分の人影があった。前よりも背が高くなり、ぱっと見ただけでま記憶とは一致しないが、そこにいるということは天岸陽向本人なのだろう。

御堂はどきどきしながら話しかけられないでいた。

すると、御堂に気付いた天岸が太陽のような笑顔を向けて、いつかと同じようにリング飴を差し出した。

「食つか？」

「食う」

つい生返事してしまう。

リンゴ飴を受け取った御堂は、しかし食べずに持っただけだ。

「話があるんだって？」

「……はい」

「なんだよ？」

御堂は口を開かない。ただ恥ずかしそうにもじもじとするだけだ。その姿をどう見たのか、天岸はまた太陽のような笑顔を御堂に向けて言う。

「そうしてると女の子みたいだな！」

「女の子だ！」

「冗談だよ、大きくなったな。……少女A」

「何故犯罪者のような扱い！？ 名前で呼んでくださいよ！？」

「だって名前教えてくれなかったし」

あ、と息つく間もなく、言葉を繋げようとして、どんと爆発音が響く。

綺麗な花火が夜空を輝かせていた。

「たーまやー！」

何かを言おうとして開いた口にリンゴ飴がつく。大きくて入りきらないのでかじる。甘い。

「好きなんだな、リンゴ飴」

「大好きです、——」

花火の音は、他の花火の音に消されてしまった。

けれど口の中に広がる甘さは偽ることのできない確かなものだった。

「何か言った？」

「変態陽向に釣られるのも一興って言った」

「なんじゃそりゃ」

どん、とまた花火が夜空を彩った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2072v/>

花火の恋

2011年7月26日03時37分発行